

国際ビジネス研究学会関東部会(第106回) 多国籍企業学会東部部会(第83回)

「多国籍企業研究・国際ビジネス研究における経済学と経営学の接合: FDIと途上国企業の成長」

2021年12月27日

合同部会 趣意書

1 目的と内容

本部会の目的は、経済学と経営学という異なる学問分野、定量的研究と定性的研究という異なるアプローチの融合のありようを検討していくことにある。そこで、本部会は、報告予定者らが現在進めている共同研究のテーマでもある情報のスピルオーバー効果、すなわち、発展途上国における海外直接投資(FDI)による地場系企業の成長に対する影響を考察しながら、この目的達成を図りたい。

従来の発展途上国におけるFDIを巡る経済学の研究では、外資系企業から地場系企業への情報のスピルオーバー効果が重視され、地場系企業は対価を支払うことなく重要な情報が得られるものと暗黙のうちに仮定されてきた。また、経済学同様、発展途上国におけるFDIを巡る経営学の先行研究にも課題があり、本部会では特に次の4点を指摘したい。第1に、情報の受け手である地場系企業の行動に関する実態の無視、第2に、外資系企業の情報のスピルオーバーへの姿勢、第3に、スピルオーバーの対象となる情報に関する実態との乖離、第4に、情報の伝達をめぐる媒介役の実態とのずれである。

こうした研究動向や実態を踏まえ、本部会では、FDIに関する仮説探索的な事例研究と情報伝達に関するパネルデータを活用した計量分析という異なるアプローチから迫りたい。まず、報告予定者の三嶋恒平から、FDIを巡る先行研究のレビューを行い、あわせて、FDIを巡るデータ収集の実態について、タイとインドの自動車産業における報告者らの調査を踏まえて具体的に紹介していく。続いて、報告予定者である古田学から、インドの自動車産業を事例とした海外直接投資(FDI)との取引関係の継続が、GVCへの参入度合いの高まりという観点での地場系企業の成長に与える影響の実証分析について報告する。

2 報告者と題目

第1報告:

報告者: 三嶋恒平(慶應義塾大学経済学部准教授)

報告題目: 「海外直接投資を巡る研究レビューとデータ収集の実態」(仮)

第2報告:

報告者: 古田学(愛知学院大学経済学部専任講師)

報告題目: 「海外直接投資との長期取引関係による地場企業のGVCへの参入動向:
インド自動車産業を例として」(仮)

日程 2022 年 1 月 22 日(土)

日時 14:00-16:20

場所 Zoom オンライン開催